

北海道の労働と福祉を考える会 会報

ともに生きる

2010年度 冬号 (第20号)

話し合しましょう!

2010年度 事務局長 勝又茜(北海道大学文学部 3年生)

こんにちは、今年度の事務局長を務めています勝又茜です。年度が始まって結構時間が経ってしまっていますが、この場を借りて改めて皆さんに、よろしく願います/これまで至らない部分をいろいろ手助けしてくれてありがとうございます、と伝えたいです。

さて、いきなりですが、ホームレス支援は深みにはまればはまるほど、わかることよりわからなくなることの方が多い!というのが、今年事務局長をやってみて思ったことです。支援の目的でも意義でも、わからないことに対して「これ」と定義してしまうとなんだか嘘臭くなってしまう、そんな気がします。ホームレス問題の背景や原因といったものを挙げればきりがありません。社会問題、と一言で言ってしまうと済みますが、労働、教育、障害や病気(医療)、ジェンダー……いくつでも考えられると思います。そういう範囲の広い問題に、個々人の問題が複雑に絡み合っているんだなあ、と、これは教科書的な感じ方ではなくて、活動している中で一つの実感として思いました。

また、同伴をしても、この人と労福会は一体いつまで関わっていけるんだろう、この人にとって何があれば幸せなんだろう、何が支えになるんだろう、何を達成するのが支援活動の目的なんだろう、とつい悶々と考えてしまいますが、考えても答えは出てこない…。労福会の活動は決して無駄ではない、でも労福会の活動それ自体だけでは社会や制度は大きく変わらない、支援の対象になる人は次々に現れるし、なんだかその場をしのいでいるだけの様な気もしてきて、不安になったりもします。

でも、そんなホームレス支援活動だからこそ、連携や繋がりが必要なんだなあ、と強く思うわけです。ここでいう繋がりとするのは、別に「みんなで仲良くやりましょう」というのではなくて、とにかくいろんな人が繋がりが合つてとことん話し合いましょう!というものです。人と人との関わりだからこそ、感じることも目的も

きっかけも人によって違う、独りだけで悶々と考えていても出口は見えてこない、そこに労福「会」として人が寄り集まる意義の一つがあるのではないかなあ、と。また、別に労福会に限らなくても、ホームレス問題に関心を持っていない(知らない)人、関心があっても支援活動には反対の人、関心を持っていて支援に賛成だけど支援活動はしていない人、支援活動している人、ホームレス問題について研究をしている人、いろいろな人を巻き込んで、話し合っていけるような世の中になれば良いなあ…とも。意見や目的を同じくする人同士で固まってしまうのが一番良くないと思います。夜回りなどをしているとどうしても、ホームレスに声をかけている支援者たち/それを横目で見ながら通り過ぎていく街の人たち…なんていう風に二分化してしまいがちかもしれませんが、変に敵対意識を持って分裂せずに混じり合つて話し合えるような社会になるのが理想です。わたしは、人に対して、冷たい人/優しい人、悪人/善人、みたいな分け方をしたくないって、昔からずっと思っています。というわけで、皆さん、いろんな人と話し合いましょう!……というんだかよくわからないまとめになってしまいました。(グダグダ…)

本当は、今年度、事務局長として(?)いろんな議論の場・話し合いの場を作ったかったのですが、あんまりできてなくてごめんなさい!!



労福会の活動と今年度の抱負

但木 水紀(北星学園大学 社会福祉学部3年)

皆さん、こんにちは。初めましての方は、初めまして。今年度、労福会の事務局次長を務めさせていただきます、北星学園大学社会福祉学部3年の但木水紀(ただきみずき)と申します。次長になったものの、あまり会議に出られていない現状で、大変ご迷惑をおかけしています。

私が‘ホームレス’という存在を知ったのは、小学校5年生の時です。当時通っていた小学校の近くの広場に、ホームレスが野宿をしていました。いつも近くを通ると、大きな荷物が複数置いてあるのが見え、公衆トイレの水道で洗濯をしたのか、衣服を柵にかけて干しています。小学生から見ても「誰かがそこで暮らしている」というのは明白でした。学校の先生や父兄の間でも話題となり、「絶対に近付かないように」と距離を置くよう注意されました。それがきっかけで、ホームレスは怖い人という考えが定着してしまっていた小学時代を覚えています。あの頃は、将来自分がホームレスの方々と接するボランティア団体に所属し、ホームレスの方々と冗談を言い合いながら笑い話をしたり、自立へ向けた真面目な話もしたりするなんて全く思いませんでした。世の中何がどうなるのか分かりませんよね、本当に(笑)

今年度で労福会の活動に参加して、早3年目となります。今まで、労福会の社会人の方や先輩方に、様々なことを教えていただきました。

ホームレスのこと、生活保護のこと、社会問題のことなど……長く活動に携わっている社会人の方や先輩方の言動によって、考えさせられることがたくさんありました。社会人の方や先輩方から伝えていただいたことは、私自身の成長を促してくれたと思っています。だから今度は、私が次の代へ繋げていければいいな、というのが今年度の個人的な抱負です。

労福会は学生が中心となり活動している団体ですから、卒業・就職によって、毎年事務局体制が変わります。社会人の方や先輩方から教わったことを次の代に継承していくことで、労福会の魅力やホームレス支援の意義を理解してくれる方が増えれば良いと思います。そのためには、学生・社会人問わず、初めて活動に参加される方々へ丁寧に接するとか、学習会を通して知識の共有を図ることは重要な場面となってくるのではないのでしょうか。初参加者への対応や学習会については、会議での議論内容の一つとし、皆で話し合っていきたいですね。

長々と書いてしまいました。今年度も次長として事務局長を支えつつ、自分なりに精一杯、活動に参加したいと思っています。どうぞよろしくお願いします！

コラム

「多摩川」

労福会会員 中西将人

学部生の時分には、多摩川を渡って通学していた。昼間は、高架下にあるいくつかのブルーシートが見える。

しかし暗くなるとブルーシートは闇に沈み、代わりに対岸の高層マンションが輝きだす。その明かりに気を取られて、ブルーシートのことなど忘

れてしまいそうになる。けれども勿論、彼らはそこに居る。見えないからといって、なかったことになるわけではない。それでもなぜ人は、明かりばかり見つめてしまうのだろう。

いま、多摩川を渡ることはなくなつたが、山谷に泊まり、隅田川貨物駅の向こうにそびえる高層マンションの明かりを仰ぐたびに、その景色を思い出す。



オオタキマサシの「もう読書するしかない！」

第3回「教育の職業的意義」本田由紀著（ちくま新書 2010年）

今回は、若者の労働における状況を考えるために、ちょっと離れた視点で教育のことを考えてみる。「教育の職業的意義」について。執筆は、東大の教育社会学教授の本田由紀。

内容は、タイトルに出てる通り、「高校や大学において、もっと就職後に役立つ職業教育を学校でしようよ」というお話。

この「教育の職業的意義」において涵養すべき能力を示すものとして用いられているのは、「＜適応＞と＜抵抗＞」という言葉。つまり、労働社会から排除されない（＜適応＞する）ための具体的な職務遂行能力としてのスキルと、職場にて不当な扱いを受けることを防いだり、何かトラブルが起きた時に対処する（＜抵抗＞する）ための能力。本書によると、この両方の側面が欠けてしまうと、教育の職業的意義は失われてしまうという。

ここで前提となるのは、現在の日本の労働市場において人々(特に若者)が置かれている過酷な状況である。つまり、低賃金で不安定な就労状況の非正規雇用者と、立場を確保されている代わりに長時間労働など

が強いられている正規雇用者の現状である。ここで注目すべきは、実はこうした状況に特に陥りやすいのが、高校や大学において具体的な職業知を養わない学部や学科(高校であれば「普通科」)卒の人なのだという。つまり、具体的なスキルも持たず、かつ労働における権利を知らない人の方が苦境に陥りやすく、苦しみやすいということ。

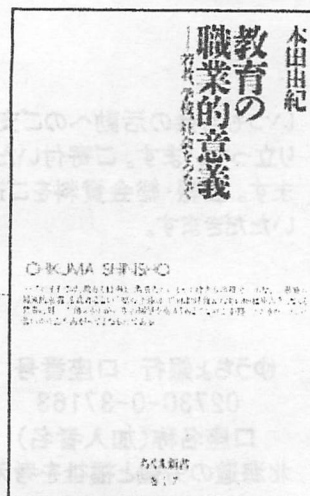
日本の多くの企業では、70年代以降、高校や大学を卒業した(職務経験の無い)若者をまとめて雇用し(＝新規学卒一括採用)、入社後に必要な職業教育を施してきた。それは裏返せば、職業に関わる具体的なことは学校において教える必要がなかったということでもある。しかし、企業側が労働力を溜め込む余裕も、必然性も希薄化している状態で、この日本独特の仕組み(「Jモード」などと呼ばれる)を維持するのは、もはや限界ではないか、というのが本田氏の視点。

そこで具体的なスキル評価・職務を設けた職種別採用に企業が移行することと合わせて、「雇われる側」は労働力を不当に買い叩かれないため

のスキル
と、その抵抗のための知識を必要としている、という。

他の処方箋は、職業的意義の高い専門高校の比率を増やすこと、労働法などを教育の現場で教えること、「柔軟な専門性」を養うこと…などなど。この辺はもっと議論が必要だろう。

本田氏は、本書の中で現在、高校や大学において行われる精神主義的な「キャリア教育」を批判しているが、いち大学生の僕としては、その批判には大いに賛同せざるをえない。なんだかモヤモヤした職業観やら「社会人マナー」なんかを身に付けて「就活」なんかするよりも、もっとはつきりしたスキルを指標に選考を受けたりするほうが分かりやすい(何が「コミュニケーション能力」だ！)。あと、労働者の権利をはつきりと教えるための労働法教育なんかは誰がなんと言おうと必要だと思う。みんなあまりにそういうことに無関心だからね…



今年度の
これまでの
スケジュール
＝活動記録



昨年度総会の様子

5月19日
5月29日
6月13日
6月26日

7月24-25日
8月21日
8月29日
8月30日

9月11日
9月25日
10月1日
10月16日

札幌市との意見交換会
炊き出し①(札幌市と共催)
臨時総会
炊き出し②

全国・地域寄せ場交流会
炊き出し③(司法書士会と共催)
夏季人数調査
札幌市との意見交換会

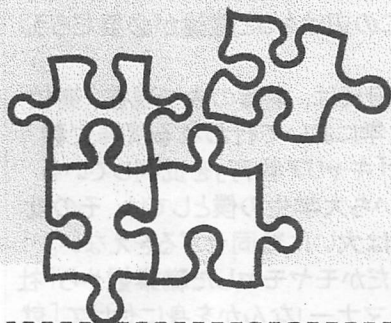
炊き出し④(札幌市と共催)
寄せ場交流会の報告会
事例学習会
炊き出し⑤

●第1・3土曜に夜回り、第2土曜に運営会議(通年)

寄付・カンパのお願い

いつも当会の活動へのご支援、ありがとうございます。当会の活動は、みなさまの会費・寄付、助成金などによって成り立っています。ご寄付いただける場合は、下記のゆうちょ銀行口座にお振り込み頂きます様、よろしくお願い申し上げます。会報・総会資料をご送付させていただきます。

ゆうちょ銀行 口座番号
02730-0-37163
口座名称(加入者名)
北海道の労働と福祉を考える会



物資寄付のお願い

また、当会では物資現物での寄付も受け付けております。

もしご不要なものの中で、当会の活動に利用できそうなものがあれば、

ぜひご提供いただければと思っております。

ただし、着物(和服)・女性ものの衣類などのように

常時受け付けていないものや、
当会の在庫状況により受け付けられないものなどもございます。
必ず送付前に事務局までご相談いただきますようお願いいたします。
以下必要としている物資の例を記します。

- ・未使用の官製ハガキ・切手
(郵便物の発送に利用いたします)
- ・使い捨て剃刀、フェイスタオル、石鹸、靴下、また保存のきく食品など
(相談会の際に配っています)

編集後記

このたびは、個人的な事情で発行が寄稿をいただいてから1か月以上遅れてしまい、ご迷惑をおかけして大変申し訳ありませんでした。次号はスムーズに発行できるよう気をつけてまいります。

新体制になって早半年近く。依然おじさんたちを取り巻く環境や、活動の難しさなど問題は山積みですが、助け合って頑張っていきたいと思います。
(庄井友輝)

前回の会報で、「次回こそは遅れずに会報

を…」といいながらも、いつにも増して遅れてしまった事に、そろそろ言い訳のしようもないなあと途方に暮れております。すいません。にしても、最近はメインの活動の方もご無沙汰になってしまっていて、会報だけ作るのもいびつな感じがしないでもないですが、活動の現場を離れたところであらためて労福会の活動を見ていると、しみじみと感じるものも、やはりあります。これから先、労福会やら貧困の問題とどう向き合っていくべきか、思索している日々であります。(大滝雅史)

<発行元>

北海道の労働と福祉を考える会

〒069-8555

北海道江別市文京区11

札幌学院大学嶋田佳広研究室

編集責任：大滝雅史、庄井友輝

ホームページ：<http://roufuku.org/>

ブログ[sapporo路上通信]：<http://roufuku6029.blog95.fc2.com/>

<連絡先>

電話 090-7515-8393 (勝又)

E-mail info@roufuku.org

郵便物などは左記住所にお願いいたします。